

2011年8月25日

四日市東日本大震災支援の会  
代表 鬼頭浩文（四日市大学）

2011年8月11～13日に実施した四日市東日本大震災支援の会第6回の派遣は、災害ボランティアの作業は行わず、今後の支援のあり方を検討するための調査・視察派遣となった。われわれの活動の中心となった宮城県においてボランティアニーズが徐々に終息に向かい、災害ボラセンが生活支援のための拠点に衣替えをするケースが目立ち始めていたからである。5月上旬から作業を継続してきた泥だし中心の活動は、今後は生活支援に変わっていくことになる。われわれの活動も、今後は大きく変化する必要に迫られている。

今回は、現地の被災者やボラセン担当者たちの本当の気持ちを聞き出すためにも、被災者を同伴してヒアリングを行った。被災者に他地域の被災状況を見ていただき、広い視野から復興に被災者自らが立ち向かってもらいたいという願いもあった。同行したのは、本会の最初の派遣で作業に入らせていただいたお宅の被災者（北村さん）である。われわれが片付け作業を



行ってから、少しずつ完全ではないが通常の生活に戻ることが可能となり、周りを見る余裕が少しだけできたという。本会は、安全な活動を継続するため、彼女に現地でのサポートを引き受けていただき、水分補給や物資の運搬を手伝っていただいている。今回は彼女自身の体験を知ることと、彼女自身がほかの被災地を観ることによって考えた心情を会として共有することが大きな目的である。この派遣を、被災者の気持ちに寄り添った本会の今後の支援活動につなげていきたい。

#### <1日目>2011年8月11日（震災からちょうど5か月目の月命日）

東松島市で被災した北村さんを伴い、彼女のお母さんの故郷である牡鹿半島の給分浜にある実家まで被災地を視察する計画をたてた。新幹線で仙台市に入り、レンタカーで東松島市に向かい、北村さんのお宅で待ち合わせした。

その後、東松島市から石巻市に入り、石巻が展望できる日和山から被災地をみた。標高が約60mの日和山は、津波が押し寄せた市街地から多くの市民が避難のために駆け上った小高い山である。多くの方が津波で流されて亡くなった「もと市街地」が見渡せる。6月に訪問した時と比べると、家が流されて土台だけになって瓦礫が散乱していた赤茶けた市街地は、大きな瓦礫が撤去されて植物が育ち始め、緑が目立つようになっていた。しかし、相変わらず人の気配は少なく、復興のゴールを思い描くことは全くできない。



日和山を下りて壊滅的な被害を受けた工場地帯を走り、牡鹿半島方面に移動した。平らな仙台平野は、この辺りからリアス式海岸の様相を示すようになる。標高の高い半島を越えると海が見下ろせるようになり、やがて小さな集落に近づく。数十件の家が建っていたであろう海岸近くには、土台だけが残されている。やや高い山間には、津波に流されずに助かった数件の家があり、人々の生活の気配はある。しかし、多くの家が流されており、人的被害の深刻さも予想された。しかし、北村さんによれば、日頃から津波に対する警戒をしており、地震発生後にすぐに高台に避難したため、この半島では人的被害が少なかったということである。

いくつかの集落を過ぎ、目的地であった給分浜に到着した。北村さんが小さいころに何度も遊びに行ったお母さんの実家は、完全に土台だけとなり、何も残されていなかった。その光景にだれも言葉を発することができず、クルマから下りることもできなかった。

無言のまま東松島市に戻り、北村さんを自宅まで送った。1日目の視察は、ここまでである。翌日は再び北村さんを伴って岩手県方面に向かう。

## <2日目>

仙台市の宿泊場所を出発し、北村さんをピックアップして国道45号線を北上、宮城県南三陸町に向かった。内陸にある45号線（三陸道）は、若干の道路の段差はあるものの、被害は大きくない。しかし、45号線から山間を15分ほど走ると、津波の爪痕が観察されるようになってくる。まだ完全に山中で、こんなところまで津波が来るとは全く思えないような山に囲まれた川を、津波は上っていったことになる。



海が近付いてきて、風景は一変する。特有のヘドロの痕跡で津波の到達を確認しながら山村を進むと、急に家の倒壊がひどくなり、やがて2階まで津波が走った痕跡が観察されるようになる。遂には、木造家屋は痕跡もなく流され、鉄筋コンクリートの3階や4階まで津波が到達し、ビルの屋上にクルマが取り残されていたり、鉄橋が橋脚ごと破壊されて流されていたりと、とても信じられない光景が続く。

道路も地盤沈下により冠水して、嵩上げされた舗装されていない仮設道路を進んでいく。ショッキングな光景が広がっている南三陸町を抜け、山間に道路は入っていく。すぐに被害を受けていない家屋が並ぶエリアになる。山に向かいトンネルを抜けると、気仙沼に近づいていく。

バイパスから海岸近くの市街地に向かう道路に入った。比較的被害が少ないエリアを抜けて坂道を下っていくと、またもや景色が急変し、まわりは津波で全壊した「もと街並み」になる。気仙沼の港は、工場や商店が立ち並んでいたと思われるが、生活や仕事の機能を全く失った廃墟が広がっていた。たまに営業を再開したガソリンスタンド



や商店があるのだが、残念ながら活気はなく、客は少ない。港を抜けて、テレビでも中継されていた、津波が到達した後に大火災が発生したエリアに入って行く。かろうじて残された建物は、ほとんど火事で屋根が落ち、5 か月たっても無残な姿をさらしていた。このあたりも地盤沈下で海水が入ってきており、復旧の作業は進んでいない。

トンネルをいくつか抜けると、岩手県に入る。陸前高田市も、被害はひどい。このあと、大船渡市、釜石市、大槌町まで、45号線を北上していった。リアス式海岸では、突き出た半島の山間をトンネルをくぐって乗越して湾に下りていく。何もないうらい津波が家屋を無情に押し流した風景は、言葉で表現することが難しい。



また山間に入り、また湾に下りる。これを何度も繰り返した末に、目的地である山田町に到達した。ここは、みえ災害ボランティア支援センターが20回にわたって派遣を行っている町である。われわれが訪問した8月12日は、みえ災害ボランティア支援センターの派遣隊が、13日からの盆休みを前に一旦引き揚げをしている期間になっていた。現地ボラセンのスタッフの方にお話をうかがった。ここでもボランティアニーズが減ってきており、ボラセンとして活動の方向転換時期が来ているという認識だった。今後は仮設住宅に入居した被災者への生活支援が中心になっていく。ガムシャラに瓦礫を片付けるという作業から、被災者と密に接しながら心のケアも含めた支援活動が求められるようになっていく。より長期の滞在によって現地の生活文化にも溶け込み、被災者の気持ちに寄り添うデリケートな活動になるであろう（ヒアリングの詳細は別にまとめる予定である）。

ヒアリングを終えて、遠野を経て東北道を南下し、仙台の宿泊場所に向かった。この日は北村さんも宿に宿泊してもらうことになった。ゆっくり温泉に浸かった後に、食事をしながら、被災当時の状況を聞かせていただいた。石巻の職場が津波の直撃を受けて浸水孤立し、一夜を職場で過ごした北村さんは、翌日には連絡の取れない二人のお子さんを心配し、胸まで海水に浸かりながら数時間かけて東松島市の自宅に戻ったという。しかし、津波で1階が完全に浸水した自宅には、子どもたちは居なかったという。中学2年生の娘さんをとくに心配していた理由は、通学路に川を渡る橋があり、そこを津波が通った形跡があったからである。地震のあった11日は3時過ぎに帰宅する予定を聞いていた北村さんは、またも全身ずぶぬれになって中学校まで向かった。そこで娘に再会し、雪が降る寒い夜を中学校で震えて明かしたという。のちに、石巻市の高台にある高校に通っていた高校2年生の息子さんは、数百人の市民が避難してきて、ほとんど食料も水もないままに高校で二晩を過ごし、徒歩で帰宅したという。二日目の唯一の食料はクラスに2個だけ配給されたカップ麺で、約20名の男子で1つのカップ麺を、一人一本ずつ交替で麺を食べたということである。

それから自宅で避難生活を送りながら片づけをするものの、瓦礫の運び出し、泥のかきだし、畳の撤去、また泥だし、ここまですべて1か月以上が必要だったということである。震災後の2週間は入浴ができないまま片付け作業が続き、十分な量の食料は、3週間目になってようやく摂ることができるようになった。

被災者の体験は、何を聞いても状況は全く想像ができない。北村さんのお宅の近くにある



小学校でも 10 人以上の小学生が亡くなり、卒業式の前日だった中学校でも数名の卒業生が亡くなったという。道端や商店の脇にご遺体が横たわっていても、だれもどうしようもない。津波で流されていく人を救えなかったことを悔い、知り合いや親せきが亡くなったことを知るたびに嘆く毎日は、本当につらい時間であったろう。不自由な生活を送るなかで知らされる不幸の数々は、とても三重県で生活しているわれわれには想像ができない。現在でも避難所や仮設住宅で生活している方が十万人を超え、仕事を失った方の数は把握できていないという。甚大被災地では、岩手県と宮城県でおおよそ 4 割の企業が、福島では 7 割以上の企業が営業不能状態に置かれており、今でも解散や解雇が相次いでいるという。

われわれには、何ができるのか、何をすべきなのか、今後の支援活動は、とても難しいものである。

### <3 日目>

この日は、福島県の原因事故で避難した行政・市民のお話をうかがう計画をたてていた。しかし、急きょ予定を変更し、福島県の新潟県との県境に近い金山町に向かった。7 月 29 から 30 日に新潟と福島を襲った豪雨災害の被災地を視察するためである。金山町には、宮城県から東日本大震災で蓄積されたノウハウが物資・人員とともに移設されたという。信じられないスピードで被災 3 日後にはボラセンが立ち上がり、すぐに全国からボランティアの受け入れが始まった。

当初はボランティアが新潟に集中していたようで、数十のニーズに対してボランティアが平日に 30 名程度という状況があったようだが、すぐに百名以上のボランティアが集まるようになり、われわれが訪問した 13 日にも約 160 名が作業をしていた。これだけの数のボランティアが整然と作業に派遣されていき、それでいながら物資に十分余裕があるというのは、東日本大震災の発生から 1 か月たったゴールデンウィークのわれわれの第 1 回の活動のときを思うと、とても信じられない状況である。

場合によればわれわれの会からボラバスを派遣する必要があるかと思って訪問をしたのだが、すでにニーズが終息に近づいている段階にあった。ボラセンの現状を発信するブログでは、8 月 28 日に「感謝のつどい」を開催してボラセンが閉所されるという情報が伝えられている。今回は訪問していない隣の只見町においても、道路が寸断されてアクセスが非常に厳しい状況の中、ニーズは着実に減少方向にあり、こちらも終息が間近ということである。

### <おわりに>

災害ボラセンが閉所するようになり、片付けは確実に終息に向かっている。政府がビジョンを示して復興へのベクトルが見えるようになれば、国民はボランティアなどを通じて、さらに復興に着実に貢献していこう。しかし、多くのボランティアが支援活動のコンテンツに迷いを感じていると思われる。われわれ四日市東日本大震災支援の会でも、今後の活動について意見が分かれている。まだまだ支援は必要ではあるが、何をすべきか、難しいところである。

